

子ども学研究を拓くために

——投稿論文部門の編集を終えて——

編集委員長
宮下孝広
(白百合女子大学文学部教授)

子どもの発達や教育に関心を持つ人で、ジャン・ピアジェの名前を知らない人はいないでしょう。彼の問題関心を端的にまとめれば「人間はどんな種類の認識をもち、それは生まれてから大人になるまでに、どのような形をへて発展するのだろうか」(ボーデン、1980、p. 9) となるでしょう。

彼が研究を始めた20世紀前半頃、子どもは「大人のミニチュア」として捉えられることが通例でした。それに対して、子どもは(少なくともその認識において)大人とは異なる存在であることを示し、認知発達に関する心理学的な研究領域を開拓したのです。しかしピアジェ自身は「博物学者であり、生物学者たる教育を受け、認識論の諸問題に興味をもち、心理学の正式な研究には手をつけたことのない(私)」と自己規定しています(フラベル、1969、p. 9)。

彼は自分の研究を「発生的認識論」の研究と呼び、生物学と哲学(認識論)を一つにまとめることを企図していました。両者をつなぐ媒介として心理学の領域に足を踏み入れ、2・3年で片づけるつもりが、結局、その後の人生のほとんどを発達心理学の研究に捧げることになったということです。

彼の研究の方法もまたユニークです。まず子どもに、物の永続性や数・量、時間や空間、また因果性に関する課題など、認識論の主要なテーマに関わる問題を投げかけます。そして、それについての子どもの考えを、回答に即して深いところまで聞き出していき、いわゆる臨床法を用いたのです。ここにおいて重要なのは、正しく答えられるかどうかよりも、むしろ誤った回答の内容に注目することで、その背後にある子どもなりの認識の構造を抽出することでした。それによって子どもの認識が質的に異なる4つの段階を経て発達していく過程として捉えられるという理論を生み出したのです(Gardner, H., 1982)。

彼の研究に対して、さまざまな立場から批判がなされてきたことも事実です。しかしそのことも含めて、子どもの発達に関する心理学的な研究の領域を確立し、その後の多くの研究の基盤となる成果を残したことは、誰もが認める偉大な功績です。このようなことを可能にしたのは、彼が生物学でトレーニングを受け、認識論に関心を持っていたからだ、と言うと言いき

でしょうか。心理学の主流は一貫して実験心理学だと思いますが、その問題関心や研究方法にとらわれず、彼ならではの研究を継続できたのは、彼自身が言うように、心理学という枠にも型にもはまらなかったからだと思われてなりません。

翻って、子ども学の研究はまだその歩みを始めたばかりの段階です。しかも、小林登代表が述べられているとおり、子ども学の強みは学際研究であり、環学研究であることです(小林、2006)。子どもとその周辺に生じている具体的な事象を問題として共有し、それぞれの研究者が背景に持つ理論や方法論を尊重しつつも、他領域の研究者、また一般の人々にも説得的な根拠を基にしながら、子ども学という研究領域を拓いていくことが私達の課題であると考えます。その意味で、第2、第3のピアジェが生まれる土壌をこのチャイルドサイエンス誌に作っていくことが投稿論文部門の責務と言えるでしょう。

今号に掲載の2編の論文は初めて子ども学会の査読を経た論文ということになります。もちろん第一義的には著者の方々の業績と言わなくてはなりませんが、一面、匿名の2人の査読者との確認・修正のやり取りを通じて、お互いに知的刺激を受けながら、作り上げられていった成果と見ることもできます。また、残念ながら掲載に至らなかった他の2編の論文に対して、査読者の方々からは厳しくも温かい問題点の指摘や、より良い研究にしていくための丁寧な提案がなされました。編集委員長の立場から一連の経過を見守らせていただきながら、このような過程を経て、子ども学の学問領域が基礎づけられていくのだろうという強い手応えをつかむことができました。

どうか会員の皆様には今後ふるって投稿していただき、子ども学研究に参画して下さるよう、心からお待ちしております。

<文献>

- ボーデン、M. A., 波多野完治訳『ピアジェ』, 岩波書店, 1980
 フラベル、J. H., 岸本弘・岸本紀子訳『ピアジェ心理学入門 上』, 明治図書, 1969
 Gardner, H., "Art, Mind and Brain: A Cognitive Approach to Creativity." Basic Books, 1982
 小林 登, 「学問を開かれた場に置くために」, 『チャイルドサイエンス vol.3』, 日本子ども学会, 2006